○　周防　小澤ちゑ子

前の小川は私のように底は見ゆるが水清ひ

○　伊勢　山田ひさ子

今日は嬉しき二人の影を映す水田に田植歌

○　小石川野菊

月はすだれにみだれたまゝの萩の衣をうつし出す

○　能登　しらゆり

白ろい卵の花夫にすれば紅のつゝじは妻のやう

○　三重　山本富士子

兄は凱旋弟は戰死赤と白とに咲くつゝじ

○　豐後　松瓦かをり

春の女神が土筆の筆で一夜染めたか花の色

○　あやめ子

娘美いのはお家のかざり牡丹芍藥庭かざり

○　丹波　栗美子

君がかざしの櫻にまとふ蝶も羨む人もある

○　滋賀　辰井琴子

京は女よ女は舞子宴席を歸へれば夜が明ける

○　芝區　岡田すい子

寢たる坊やの枕邊守るお友可愛や犬張子

○　德島　仁木花汀

百合の雫で白粉解いて塗ける妹の愛らしさ

○　岩代　松山薔薇

馬もようこね此の山里を緋桃下行く自轉車隊

○　千葉　わかな子

姉は十八都で學びわたしや絲ひき學資をおくる

○　はつ子

垣の卯の花まさかりなればなけよ一聲ほとゝぎす

○　茨城　小泉はま子

蝶を追はんか追はれば摘めぬ里の川邊の白すみれ

○　駿河　古山秋月

花の吹雪に流を下る簑を着せたい筏さし

○　下總　大崎範枝

金波銀波の夕ぐれ磯に白帆あげたる珊瑚船

○　埼玉　名なし草

紅いたすきに姉樣かぶり桑をつみとるやさ少女

○　堺　竹叟文子

花や召しませ品よい花を品のよいのは女郎花

○　奈良　藤田せい子

波のひゞきに船歌消えて夕日落ち行く佐渡が島

○　秋田　喜佐子

木立青空すきまもないに何所洩れ來る笛の音

○　近江　松村波子

田植するのは厭ひはせねど赤い襷に泥がつく

○　本所　登利子

遙か向方は菖蒲の如小さい繪傘が見え隱れ

○　弘前　佐野てる子

花のいづれに我が歌やろと思ふ絕え間を蝶が來る

○　岩代　三浦たい子

繪の具揃へて向ふてみたがきまりわろさに後見る

廣津柳浪先生選

短篇小說

天　小さき懺悔

岩代須賀川本町　服部水仙

月末調を書き終へて、時計を見ればもう三時十分。其を校長の前に出して、紫風呂敷包を小脇に、袴の紐の緩みをひきめながら校門を出た。きのふの雨に蘇生た樣な草々、紫床しき薫、鮮かなたんぽゝ等が今を盛りと唉競ふて居る、朝に夕に通ひ馴れた道を、今日の修身に言ひ聞かした孝子の話や、さては新しく敎へた唱歌を皆能く覺へた事などを、考へながら獨心樂しく、微笑ましく、足を早めた。唱歌と言へばそうだ、あの何時も聲の宜い早川が今日も見えない樣だつた、昨日と一昨日と其前の日と今日で都合五日の欠席、一體如何したのだらう、二年級では一番勉强家の無邪氣な[illegible]等生の早川妙子が此處に欠席するとは……若しや病氣になつたのでは無いか、それとも亦家に何か變つた事でも……寧そ今一寸寄つて見ようか知ら、いや〳〵明日他の生徒に聞いてからに仕樣などと考へながら躊躇り行く自分の腰に、「先生！」とばかり抱きついた者がある。

「オヤ早川さん如何してまア……」

と私は嬉しい樣な、懷かしい樣な、氣持して其房々とした髮の毛をなでながら見れば、二人は土橋の上に、土橋と共に、淺き流に其影を寫して居るのであつた。

「如何して學校休んで居らつしやるの？」と袴に埋めた其顏をのぞき込めば、「あのう……」と擧げた眞白き顏の表情に富んだパッチリとした目に、美しい露が宿つて居た。

「オヤ！如何して？」私は何となく胸騷しく覺へた。

「先生！あの家の姉ちやん……死んぢまつたの……」ワッとばかり泣き出して落つる涙を、左の手に固く握つて居る蓮華草の束もて受けて居る。

「え姉ちやんが？……死去なつたつて？……」

「えゝそうなの家のお池には入つて……姉ちやんはお池に投身つて死、死んぢまつたの……」またも溢るゝ涙を今度は可愛いゝ手に拂つて居る。

「えつお池には入つて……」悲慘なる其死の影には何か秘密が隱れて居るのだらうと私は思つた。年は慥今年十九と覺えて居たが……すると突然、

「先生！姉ちやんは許して下さるでせうか？……」

「え、許してつて何を……」不思議な間に、じつと瞶れば氣の故か彼の禍々としたる頰の邊りの何となくやつれた樣に思はれた。

「姉ちやんはね先生！母さんが惡るい爲めに死んぢやつたんですつて、だつて白根の兄さんが仰言つたもの……兄さんは此頃一寸も往らつしやらなかつたんですもの私が母樣に此手紙を拾つたと言て父樣とこへ持つてお出でと言はれて、父樣にあげたら父樣は其時大變姉ちやんを叱りましたの不埒だつて……姉ちやんは其時そんな手紙覺えはありませんつて泣いてましたの……それから兄さんはちつともねらつしやらないんです、姉ちやんはね、白根の兄さんは私を其麼者と思つてお出てなのだらうか情ないつて泣てばかり居ましたの、けれど姉ちやんの死んだ朝、父樣と兄樣は大そう泣いたんです光子許して呉れつてね、そして母樣を母樣を怒つてね……母樣は今永沼の祖母さんとこに居るのです、姉ちやんは手紙を書いて死んだの……先生！謝つて頂戴な、妙が惡るかつたんだからつて……ねえ妙があの手紙を父樣にあげたものだから……よ、先生謝つて頂戴！」あゝ悲慘ではないか、眞、妙子の母は光子には繼母てあつた。白根の兄樣とは、光子の許婚、それが光子の或浮名を聞いて、斷然結婚を辭したとの事を一寸聞いた。

「オ、謝つてあげませう、あげませうとも」と、私は妙子の手を取つて、小高き岡に、怨を飮んで身を投じた早川光子の墓を訪ふて、姉を戀ふて泣く、妙子の可憐に罪なき心を告げて、妙子の爲めには、今は實家に幽閉の罪深き繼母の科をも許されんことを希つたのである。

上乘の作、寸分の隙なし、此篇には妙子、其姉の光子、許嫁の白根、光子の繼母、父、女教師等の人物が含まれてあつて、皆それ〴〵の性格があらはされてある。妙子が手紙を見せた事から姉が身を失ふに至る動機も、能く穿たれ、女教師の餘所ながら同情するのも、短篇にしては不思議に好く出來た作である（選者評）

地

○世は春

京都市岡崎町御池上ル
中村傳三郎樣方

松永みつる

上

「文ちやんこつち。」と襖の葉を奇麗に刈り込んだ生籬の潜門を庭園へ驅けて來たのは敏子と云つて此家の一人娘年は八つか九つの可愛らしい少女てある、續いては入つて來たのは二つ程年下の顏容こそ可愛らしいが身に着てるものは劣つて見える。

廣い泉水を一廻り山から導いた覺の水が落ちて小さい瀧をなす邊汀近う寄つて菫の花を一摘み水に投げ入れて、

「鯉よ鯉よ緋鯉よ——」と優しい足拍子をとつて楓の樣な掌を打つと群れ集ふて居た緋鯉の大きいのがぶくと一口。

「あら浮いてよ。」

「あゝ、」文ちやんも面白がつて居たが手に何もないので。紅梅の今を盛と咲亂れてるのを文ちやんは採うとすると、

「あれ文ちやん」と敏子は振り返つて「折つては不可わ」

文ちやんは何と思つたか一寸そちらを見たばかり花に手が觸れると。

「何故折るの折るのなら折つて見。お父樣に云てあげるから」と小さき女王の見脈凄し。

「云ても構はないわ、お母樣が姿家のだつて云つたも

最新刊
鈴木秋風君著
太田三郎君補
小說美文
晴
（好評）
全一册
上製
正價四拾五錢　郵稅四錢
特別賣價四拾錢　郵稅不要
詳細は前號本號の女子文壇の廣告紙にあり
就て精讀を乞ふ